

### 特集「道徳科における“個別最適な学び”」の趣旨

2017（平成29）年3月の学習指導要領告示が、これから目指すべき学校教育の在り方を描き出し、その議論にしばらくの静けさをもたらした……とは言い切れないかもしれない。

2018（平成30）年6月には、文部科学省から「Society 5.0 に向けた人材育成～社会が変わる、学びが変わる～」が示され、学校 ver.3.0 への移行、“公正に個別最適化された学び”の実現の必要性が指摘された。また、2019（平成31）年4月の「新しい時代の初等中等教育の在り方」（諮問）を受け、2021（令和3）年1月には、中央教育審議会から「教育課程部会における審議のまとめ」が示された上で、「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」が答申された。

そこでは、現行の学習指導要領に示された資質・能力の育成を着実に進めるために、新たに学校における基盤的なツールとなる ICT を最大限活用しながら、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく育成する“個別最適な学び”と、子供たちの多様な個性を最大限に生かす“協働的な学び”の一体的な充実を図ることが求められたわけである。

このような動向を踏まえ、2021（令和3）年6月開催の本学会第27回研究発表大会においても「ICTを活用した道徳授業の可能性—質の高い討議・協働活動に向けて—」をテーマとして、“協働的な学び”に焦点を当てたシンポジウム&課題研究が行われたところである。

そこで本特集では、一体的な充実を成すもう一方の“個別最適な学び”を、そのテーマとして設定したい。“個別最適な学び”は、ICT活用による学習履歴（スタディ・ログ）や学習調整といった言葉を伴い、指導の個別化と学習の個性化という個に応じた指導を学習者の視点から整理した概念とされるが、特別の教科である道徳科において、この“個別最適な学び”はどのように捉えられるだろうか。まずはそこから議論を始めたい。もちろん、この問いを起点として、そのような学びを如何にして実現していこうかという展開もあるだろうし、他方で、それは改めて実現を目指さなければならない学びなのかといった投げかけもあるかもしれない。

様々な立場から様々な方向へと、道徳科における“個別最適な学び”が活発に論じられ、“協働的な学び”に関する議論と相俟って、令和の日本型学校教育における道徳授業のあり方をより一層考えていく一つの契機となること、それが本特集の趣旨である。



### 「個別最適な学び」を創る

藤永 啓吾（山口大学教育学部附属光中学校）

「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」(答申)が中央教育審議会から示され、現場では、指導者の視点から学習者の視点へと考えが移り変わり、「個別最適な学び」とはどのような学びなのか、「協働的な学び」を実現するにはどうしたらよいのか等の議論が湧き上がっていると感じています。一方で、学習指導要領改訂の方向性として示された「何ができるようになるのか」「何を学ぶのか」「どのように学ぶのか」に対して新たに追加された内容として負担を

感じている教師が一定数いるのも事実です。しかし、これらは新たに追加されたものではなく、学習指導要領の完全実施を今以上に豊かにする考え方の一つだと感じています。そもそもどうして子どもにとって「個別最適な学び」が必要なのかですが、それは今後更に加速が予測される VUCA (Volatile, Uncertain, Complex and Ambiguous/変わりやすく、不確か。複雑で曖昧。) な時代の中においても、一人一人が自分の良さや可能性を認識し、人間としてよりよい生き方を模索しながらも、持続可能な社会の創り手となるに必要な力を育むためだと考えています。例えば、自らの学習状況をみつめる力、与えられる方法が今の自分に必要なのかを判断する力、与えられる教材等を活用するために必要な知識・技能を見極める力、問いを創り出す力、問いを考えるために必要な道具を使いこなす力等が考えられます。これらは決して他者から与えられるだけで身に付くものではなく、自らが自らのよりよい生き方のためにという強い思いをもって取り組む中において身に付くものであるため、今後どのような時代になったとしても、自らが人生を切り拓いていくという力強い原動力になると思っています。

さて、現在の、特に中学校での道徳科において、「個別最適な学び」は充実しているのでしょうか。道徳科の授業を創る方法として、一般的には授業者である教師が子どもの実態や道徳科の内容項目を基にねらいを設定し、内容や方法を創っているのではないかと思います。また、学びを深めるための問いや広げるための問い等も、あらかじめ教師が創っていることが多いのではないのでしょうか。公教育において、50分という枠の中で行われる授業であるため、意図的・計画的な内容が求められることを考えると、このような流れは自然ではあるのですが、学習者である子どもの立場に立つことをせず、教師の考えだけで授業を創っているのでは、いつまでもたっても「個別最適な学び」は実現されないと思います。例えば、教師が事前に創った問いだけで授業を展開したならば、子どもは自分の事として学びを深めることには至らず、自らが学んだという実感をもつことが難しくなります。また、問いを考えるための考え方に対して、「〇〇のツール(道具)を使って考えてみよう」というように教師が一方向的に示すだけでは、やはり自ら問いを考えたり、解決したり、新たな考えを見出したりするという実感もちにくくなります。しかし、子ども自身が自ら問いを創ったり、問いに対する考え方や道具等を選択したりしたならば、学びを自分の事と認識し、自らの力で考え、納得解を生み出すのではないかと思います。これは、単に発表に対して声に出すのかタブレットに入力するのかを選択するといったものではなく、何を学び、どのように考えるのかという学びの本質を自らが見出すということです。下記の3枚の写真は同じ授業の中で、同じ問いに対してタブレットを活用しながら考えを広げたり深めたりしている様子を撮影したものです。



左の子どもはピラミッドチャートを、真ん中の子どもはクラゲチャートを、右側の子どもはベン図を活用して問いに対する自分の考えを創っています。このような、自らが自らに合った学びを自らの経験と知識・技能を通して選択する学びを創っていくことが、今後求められる「個別最適な学び」となっていくのではないかと考えています。

学びを指導者の立場だけでなく、学習者である子どもの立場で創るという授業創りの要ともいえる「個別最適な学び」について、今後も多様な視点から考え、実践し、子どもの心を育てていきたいと考えています。



## 道徳科における「個別最適な学び」と「主体的・対話的で深い学び」

毛内 嘉威（秋田公立美術大学）

「指導の個別化」と「学習の個性化」を教師視点から整理した概念が「個に応じた指導」であり、この「個に応じた指導」を学習者視点から整理した概念が「個別最適な学び」である。道徳科における「個別最適な学び」とは、子供主体の質の高い道徳授業の構築であり、道徳科における「主体的・対話的で深い学び」のある道徳授業の実現と言える。

現代は、AI（人工知能）や自動化、全ての人ともものがつながるIoTやビッグデータ、Society5.0による超スマート社会など、子供たちを取り巻く環境が大きく変わっている。学校では、特別支援学校や特別支援学級に在籍する子供の増加、発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする子供の増加、日本語指導を必要とする子供の増加、子供の相対的貧困率の増加もあり、様々な生徒指導上の課題が増加している。さらに、新型コロナウイルス感染症のパンデミックが起これ、子供同士のつながり、子供と教師のつながり、子供と社会とのつながりが失われ、子供を孤立させている。子供の心の教育を如何にして図るのか、その基盤としての道徳教育をどう展開していくのか、学校教育に喫緊の課題として課せられている。

特に、道徳教育の要である道徳科の在り方は重要である。道徳科が目指すものは、道徳教育と同様によりよく生きるための基盤となる道徳性（内面的資質）を養うことである。道徳授業の構想においても、このことを忘れてはならない。

質の高い道徳授業の構築には、明確な意図（指導観）をもって指導の計画を立て、授業の中で予想される具体的な子供の学習状況を想定し、学習指導過程や指導方法を工夫しながら、道徳科の特質である道徳性の育成を第一に考えて授業を構想することが重要である。

道徳授業のねらいは、前述した通りよりよく生きるための基盤となる道徳性を育てることであり、そのためには子供の実態把握等に基づく指導計画（全体計画、別葉、年間指導計画）が必要不可欠である。学校・家庭・地域の実態から、どのような子供を育てていくのかを明らかにし、そのための効果的な教材の活用方法を具体的に構想することである。

道徳授業の質的転換を表す「考え、議論する道徳」があるが、これは「主体的・対話的で深い学び」と同じ意味である。これからの道徳授業は、発達の段階に応じ、道徳的諸価値についての理解を基に、道徳的な課題を一人一人の子供が自分自身の問題と捉え、「主体的・対話的で深い学び」のある授業を構想し、質の高い授業に質的転換を図ることが求められている。これまで以上に自分との関わりで（自分事として）捉え、多面的・多角的に考えていく授業が大切になってくる。

道徳授業においては、子供に主体的に考えさせることを明確にして、1単位時間の中に①道徳的諸価値について理解する学習、②自己を見つめる学習、③物事を多面的・多角的に考える学習、④自己（人間として）の生き方についての考える学習の4つの学習が含まれていなければならない。

この授業の実現のためには、子供にどのような気づきや変容が見られたのかを確認する必要がある。子供を評価するのではなく、学習状況から道徳授業がどうだったのか、「一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか（対話的な学び）」「道徳的価値を自分自身との関わりの中で深めているか（主体的な学び）」そして「道徳的価値から自己の生き方について考えを深められたか（深い学び）」という観点から教師自らの授業を評価（振り返り）することが重要である。さらに、「主体的・対話的で深い学び」という授業改善の視点から、より質の高い、より効果的な指導を追求することが重要である。そして、忘れてはならないのが、よりよく生きるための基盤となる道徳性が育っているのかを検証することである。そのためには、教職員が成果と課題について共通理解を図ったり、校内研究等を通して深めたりして、質の高い道徳授業を目指してチーム学校として取り組むことである。

道徳科における「個別最適な学び」とは、子供にとって道徳的価値の理解を基に自己を見つめるなどの道徳的価値の自覚を深める学習を通して、自分自身の問題として受け止め、他者の多様な感じ方や考え方に触れながら、自己の生き方について考えを深めていく深い学びのある授業を展開することである。しかし、「個別最適な学び」であっても、協働的な学びでなくてはならない。また、集団の中で個が埋没してしまうことがないように、子供一人一人のよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わさり、よりよい学びを生み出していくようにすることが大切である。

最後に、道徳科の学びを通して、子供一人一人が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となってほしいと願っている。



### 「サーチライト型道徳」で目指す個別最適な学び

尾崎 正美（岡山県瀬戸内市立国府小学校）

「答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の児童が自分自身の問題と捉え、向き合う『考える道徳』『議論する道徳』（小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編）。筆者は、この文言そのものが道徳科における個別最適な学びであると考えている。子供一人一人が自己の生き方を振り返って課題を見付け、その解決のために他者との議論を通して考えを深めていく。そして見付けた自分に必要だと思う考えを日々の生活に生かしながら、さらによりよい自己の実現に努めていく。そのような学習は、子供にとって興味深く意味のある学習となるであろう。しかし、残念ながらこのような道徳科の学習はまだ一般的に行われているとは言いがたい。多くの道徳科の授業では、ねらいの達成に向けて授業者主導で発問や学習活動が構成され、捉えさせたい道徳的価値を子供が捉えることができたか否かで授業評価が行われている。このような授業は、子供を灯台の下に集め、そこから灯台（授業者）が照らす灯りの先によりよい生き方を見付けさせているような状態に思える。名付けるなら「灯台型道徳」である。そういった授業は、灯りを与えず暗闇の中、路頭に迷わせる授業に比べれば学ぶべきことが明確に示されている分、否定するわけではないが、個別最適な学びとはなりにくいのではないだろうか。学習者全員が一つの考えにのみ価値を見出すということは、一人一人異なる生き方を考える道徳科の学習においては不自然ではないだろうか。子供によっては、前学年段階の道徳的価値や他の内容項目に関わる道徳的価値を見付ける場合があるだろう。それらを出した子供は道徳科の学びができていなかったと言えるのだろうか。否、そうではないと筆者は考える。では、道徳科における個別最適な学びとは、どのような学習なのだろうか。

筆者は、道徳科における個別最適な学びとは、先ほどの「灯台型道徳」に対して「サーチライト型道徳」であると考えている。表1に、両者の学習活動の違いをまとめてみた。「サーチライト型道徳」では、子供一人一人が自己のよりよい生き方を探すためのサーチライトを手を持ち、自分のサーチライトで主体的に自己の生き方や友達の生き方（考え方）等を照らして見つめ、よりよい生き方を探す。サーチライトは、子供一人一人がもつ道徳的課題意識である。授業では子供一人一人が自分の必要に応じてサーチライトを当てる対象を替えていく。「灯台型

授業展開	サーチライト型道徳の学習活動	灯台型道徳の学習活動
導入	①特定の内容項目に関して自己の生き方を見つめ、課題意識をもつ。	①授業者から示された特定の内容項目に関する授業のテーマを知る。
展開	②教材の道徳的場面について、自分の必要感に応じて「自己の経験」「友達の考え」等を参考にしながら、多面的・多角的に大切だと思う考えを探す。 ③各自が探した考えを出し合い、それぞれの考えのよさを認めたり、疑問に感じたことを尋ねたりして、自己のよりよい生き方に必要な考えを深める。	②教材の道徳的場面について主に授業者に示された方法で、多面的・多角的に大切だと思う考えを探す。 ③各自が探した考えを出し合い、みんなにとって大切だと思う考えを見付けながら、テーマに関して自分の考えを深めていく。
終末	④学習を振り返り、考えを深めるために役立った考え方を確かめる。	④学習を振り返ったり、授業者の説話を聞いたりして、捉えた道徳的価値をより確かにする。

表1：サーチライト型道徳と灯台型道徳の授業展開



道徳」ではいわゆる「一人学び」の時間にみんなでワークシートやタブレットに記入するというように授業者が決めた活動をしていることが一般的だが、「サーチライト型道徳」では、書く、調べる、話し合う等の活動を子供が自分の必要に応じて取り組む。もしかすると、そのときに ICT を活用して調べる子供もいるかもしれない。強調したい特徴は、子供が常に「今の自分・これからの自分に必要な考えを見付けたい」と、自己の生き方をよりよくしていこうとする意識をもって学習を進めていくことと、各自が見付けた考えのよさを認め合う姿勢を大事にしていることである。もちろん、子供の見つけた考えの中には、疑問を感じるものも含まれるであろう。それをそのままにせず、感じた疑問は素直に出し合って互いに考えを深めていこうとすることも大事にする。この学習において授業者は「揺さぶり」と「評価」の役割を担う。授業の導入では子供の日常の認識を揺さぶる問いを投げかけ、展開では教材の登場人物の生き方について現在の子供のもつ道徳的価値観を揺さぶる発問を行う。そして、学習の中での一人一人の考えの変化を捉え、その学ぶ姿の成長を認め評価する。そのために、授業者には取り上げる道徳的価値について道徳性の発達段階の視点からの理解、その道徳的価値から見た子供の実態把握、そしてそれら2点と教材をつなげる分析が必要になる。それらは、これまでの道徳でも大事にされてきた基本的姿勢である。その姿勢は、個別最適な学びの実現においても重視されなければならないことは言うまでもない。



## 個別最適な学びと、子供たちの「問い」

清水 顕人 (香川大学)

中教審の令和3年答申において、「個別最適な学び」が「指導の個別化」と「学習の個性化」に整理されて示されました。学習指導要領に示されていた「個に応じた指導」が教師の視点から整理された概念であるのに対し、「個別最適な学び」は学習者の視点から整理されたものであり、このことは大変重要な意味をもちます。指導方法や指導体制の工夫改善を行う際には、学習者の視点から学習を見つめることが強く求められていると考えられます。

道徳科においては、その特質から「異なる目標に向けて、学習を深め、広げる」という「学習の個性化」が基盤であると考えられます。個々の子供たちが自己の生き方についての考えを深め、広げていくことが道徳科の学びであるからです。では、道徳科において「個別最適な学び」、特に「学習の個性化」を実現する上で、どのようなことが大切なのでしょうか。

学習者の視点から学習を見つめると、道徳科において重要なものの一つとして「問い」が挙げられます。道徳科の授業では、本時の学習課題に対して子供たちが様々な方法で自分の考えを表現したり、ICTを活用して互いの考えを交流し多面的・多角的に考えを広げたりする場面をよく目にします。これらの事はもちろん大切ですが、そもそもの学習課題が、子供たちの考えたい「問い」となっていたかどうかを学習者の視点から検討する必要があります。教師が一方的に「問い」を設定して子供たちに与えたり、考えたい「問い」自体を子供たちがもっていなかったりすれば、子供たちが主体的な学習を進めることは難しいでしょう。

子供たちの考えたい「問い」から始める授業については、多くの実践・提案がなされています。例えば、日本道徳教育方法学会ニューズレター第13期第3号に示された動画教材の中で、植田和也氏が香川大学教育学部附属坂出小学校の2つの実践を紹介しています。いずれの実践も、子供が家庭で教材を事前に読み、疑問に思ったことや見出した道徳的な問題などを「問い」としてノートに書いて教師に提出します。そして、教師は道徳科の授業でそれらの「問い」を補助黒板に示し、子供たちは互いの「問い」を共有しながら道徳科の中で問うべき「問い」として学習課題を形成します。これらの実践は1単位時間の枠の中で行われたものですが、田沼茂紀氏は、複数時間でユニット（小単元）を組むパッケージ型ユニットによる道徳科授業を

提案する中で、「問い」の重要性を示しています。田沼氏は、道徳的な「問い」について、「道徳的な問題に対して抱く個別的な性質のもの」とし、子供の数だけ個別的な「問い」が存在すると述べています。さらに、道徳科の授業で課題設定を行う際には、「問いを意図的に披瀝し合う場」「語らいを通してすり合わせ、調和的に調整し合い、学習集団全体の合意形成プロセスを経る」ことが重要だとしています。いずれにしても、教師は子供たちが考えたい個別的な「問い」を大切にし、考える価値のある「問い」を子供たち自身が設定して追究していけるような授業づくりを行うことが重要です。そのことが、「学習の個性化」につながり、「個別最適な学び」を実現する第一歩であると言えるでしょう。そして、このような学習課題の設定において、例えば ICT を活用して互いの「問い」を一覧表示して共有し、共通点や差異点に着目して価値ある「問い」をつくり上げていけば、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が一体となった学びが実現します。

佐伯胖氏は、「学習とは問い続けること」とし、教師が「教える」ことについて次のように述べています。

われわれが子どもたちに「教える」のは、「問うべき問い」に気づかせ、また、子どもたちみずからが「問いつづけている問い」に応じてあげること、また、そこから新しい「問うべき問い」を投げかけることになる。

子供たちの「問い」は、最初は小さなものであったり、道徳的な問題とは離れたものであったりするかもしれませんが、しかし、教師が学習者の視点に立ち、個々の子供たちの考えたい「問い」を受け止め、問い返したり価値づけたりすれば、子供たちの「問い」はより深く広いものとなるでしょう。それこそが、子供たちが主体的に道徳的な「問い」に気づき、自ら問い続けていく「個別最適な学び」の姿につながります。

#### 【参考文献】

佐伯胖（2003）『「学び」を問いつづけて－授業改革の原点－』小学館，343 頁

田沼茂紀（2020）『問いで紡ぐ小学校道徳科授業づくり 学びのストーリーで「自分ごと」の道徳学びを生み出す』東洋館出版社，34-36 頁



## 教育効果を意識する必要性 ～「深い学び」が得られる道徳科授業を目指して～

塩家 崇生（兵庫県伊丹市立鴻池小学校）

勤務校に一人一台タブレット端末（以下端末）が配備されて、1年が経とうとしている。各教科の学習だけでなく、学級活動や委員会活動等にも、この新たな学習ツールが当たり前のように活用される場面が見られるようになってきた。そんな中、令和3年1月26日付けの中教審答申では ICT 活用について、**教育効果を考えながら活用することが重要**であると示された。では、道徳科授業における端末活用の教育効果とは何だろうか。

文部科学省資料「特別の教科道徳の指導における ICT の活用について」では、授業展開における効果的な活用として以下のように示されている。

- (1) **端末で、他者の考えを知り、共有して**多面的・多角的に考え、自己の考えを表現する。
- (2) 改めて自己を見つめ、**端末に自己の生き方についての考えを表記し**、共有する。

昨年度は、小学4年生33名を対象に約4ヵ月間、上記(1)(2)を授業に取り入れた授業をおこない、学習者である児童たちが、端末活用についてどのように感じ、また必要としているのかを、授業のふりかえり及びアンケート、インタビュー等から明らかにしようと考えた。

その結果、児童からは端末活用について、もっと使ってみたいといった好意的な意見が多くあり、特に他者の考えを知り、共有できることにより、従来の授業では、スポットライトが当たらなかった考えや思い等が知れることに好感が得られていた。しかしながら、「深い学び」についての実感についてアンケート調査では、つながっていないと感じている児童が、クラス全体の約25%を占めていることが明らかとなった。

確かに、他者の考えを視覚的および双方向で交流することは、従来の授業モデルに比べ、時間短縮の面や、考えのインプット面において効果があるといえる。ただ、それを見ただけでは、道徳的諸価値について新たな発見や納得につながる「深い学び」に直結していないと児童は感じていたのではないだろうか。

この結果から、授業者として端末の効果的な活用についての再検証と、端末未活用の授業との比較を通して、「深い学び」の実感が持てる道徳科授業について改めて考え直す機会となった。

「タブレットは紙に勝てるのか タブレット時代の教育」の著者である赤堀侃司(2014)は、紙・端末の特性比較を行った結果、端末活用は、紙に比べて学習の実感性が低いことから、情報が脳に定着せず通り過ぎてしまうことを指摘している。さらに、紙、端末それぞれに文字・図形・写真などの情報様式の記憶および理解における有効性も違っており、その特性を理解した上で、紙と端末の併用が好ましいと主張している。

そこで、昨年度の12月から端末活用のみの授業から、端末および紙(ノート)の特性を生かしたブレンド型授業にシフトチェンジした。内容は以下のとおりである。

- (1) 端末活用は、基本的には中心発問時のみ。作業内容は、端末の特性を生かして視覚的にすぐ理解できるように、考えを色で示したり、表情を描いたり、短文を書くなど作業を簡素化したものにした。
- (2) ノートについては、それぞれが思ったこと、感じたことを言葉で書いたり、図式化したりすることで、思考をまとめたり、考えたりするためのツールとしての活用を促している。また、授業の終末では、ふりかえりを記述する時間を5分以上確保している。ふりかえるポイントとして①はじめの意識 ②授業中の発見 ③授業中の納得 ④これからの意欲 の4視点を示している。

この実践を通して大きく変化があったのは、授業のふりかえりである。明らかに端末に記入していた時よりも文字量が多くなり、また内容の質も向上した児童も増えてきた。学年末におこなった意識調査でも、ノートの活用についてほぼ全員が道徳科授業に必要なだと回答している。児童たちは、ノートに「書く」作業を通して、道徳的価値に対する考え方や感じ方、生き方について言語化し、その本質を意識することで、自己の生き方についてより深く考えるきっかけとなったのではないかと考察している。

私は、「深い学び」の実感がある授業だからこそ、児童は「主体的」になり、自己を見つめることに必要な「対話」を強く求めてくると考えている。今後も、学習者である児童たちが積極的によりよく生きることを考えたと思える授業を目指し、引き続き教育効果を意識した授業づくりについての研究をおこなっていく。



## 「個別最適な学び」へのアプローチを考える

時津 啓(島根県立大学)

「個別最適な学び」。大変分かりにくい言葉である。道徳教育の文脈で言えば、どのような学びになるのだろうか。教材はどういったものなのか。様々に考えをめぐらすが、クリアにはならない。それに対して、中央教育審議会答申「令和の日本型学校教育」の構築を目指してにおいて、「個別最適な学び」と併記されている「協働的な学び」は道徳教育の文脈でもすぐに明確になる。例えば、モラルジレンマ教材を使ったディベート、話し合い活動といった教育方法、「考え、議論する道徳」といったスローガンに至るまですぐに道徳教育との接点を見いだすことができる。私たちは、道徳教育の文脈で「個別最適な学び」をどのように捉えるべき(捉えることができるの)だろうか。

「個別最適な学び」の定義を確認しておこう。①学習者の特性や進度、到達度などに応じ、指導方法・教材や学習時間などの柔軟な提供や設定、②自らの学習を把握し、学習の進め方を工夫し、調整しながら粘り強く取り組む、③興味・関心に応じ、課題の設定、子ども自身による情報の収集、整理、分析、まとめ、表現など、主体的に学習を最適にする、などの特徴的な要件や特性を有する学びである(天笠茂「中教審答申で読む

『個別最適な学び』と『協働的な学び』『新教育ライブラリ Premier II Vol.2 令和の「個別最適な学び・協働的な学び～学びのパラダイムシフト』』ぎょうせい, 2021, 22頁)。言葉だけに注目すれば, こうした学びは巷にあふれている。ピアノや水泳教室といった「習いごと」、個別指導の学習塾, オンライン英会話などもそうであろう。しかもそれらは——ICT を利用するかどうかは別にして——, 計画的なマニュアルにしたがった「学習履歴 (ログ)」も記録されているはずだ。さらに, KADOKAWA が創設した広域通信制高校 N 高は, 「インターネットの学校」として, 少子化の中でも飛躍的に生徒数を伸ばしている。授業を中心にインターネットを介した個別学習が重視されており, ここでの学びも「個別最適な学び」と言えそうだ。また, 歴史的に見ても, 同様にこうした学習法を見つけることができる。例えば, 1960年代～1970年代の「教育の現代化」の議論において, 心理学者のスキナーはティーチングマシーンによるプログラム学習を, 心理学者のクロンバックは「適性処遇交互作用」という学習者の適性に応じた学びを提案している。日本でも 1980 年代の臨時教育審議会において, 自己教育力の育成, 個性の尊重が謳われている。

もちろん, 日常生活にあふれる学びの多くがスキル・トレーニング, 受験勉強といった試験知の習得に焦点を合わせたものである。特別の教科 道徳は「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」ことにあり, 「道徳的諸価値」の理解を目指している。ここには明らかな違いがある。さらに, たとえ歴史的にさかのぼって「個別最適な学び」との共通点を探したとしても, その試みは今日のグローバル化や多様性を重んじる社会の中で, 「物事を多面的・多角的に考え」, 自己の生き方を深める特別の教科 道徳の学習へと直結できるものでもない。歴史的な文脈や当時の状況を鑑みる必要からだ。まして「個別最適な学び」を実現するために ICT 活用による (スタディ・ログ) をいかに捉えるべきかといった問題にも答えることはできないだろう。

しかしながら, 中央教育審議会をはじめとした「個別最適な学び」をめぐる政策論を追いかける, さらにその政策を前提にどのように実現すべきかと方法論を議論するだけでは不十分であろう。なぜなら, 政策論に終始すれば, 政策の流れに追随するだけになってしまうし, 方法論に限定すれば, 政策の前提や背景は軽んじられるかもしれないからだ。日常生活にある学びに注目すれば, 「個別最適な学び」という新奇な言葉は解きほぐされて, 子供や大人の日常にある学びの延長上に位置づけることができるだろう。さらに, 歴史に注目すれば, この言葉は——筆者が気付くだけでも——「教育の現代化」, 臨教審の個性化という功罪を併せ持つ教育学的議論を踏まえた反省的な理解につなげることができる。「『個別最適な学び』をどのように実現すべきか」「そもそもどんな政策なのか」を問う必要はある。しかしながら同時に, そうした議論から一歩下がって, 日常生活のなかにある学びや現在の道徳科の学びとの関係を明らかにする。学習論の歴史的な文脈に位置づける, あるいは「道徳の時間」の特設期の教育実践, 「心のノート」「私たちの道徳」を使用した教育実践との関連性を明らかにする。そうした試みが求められるのではない。

日本道徳教育方法学会ニューズレター第 13 期第 7 号 (2022 年 1 月 20 日発行) に掲載されました  
特集「道徳科における“個別最適な学び”」を再編集したものです。

無断転載を禁じます。

日本道徳教育方法学会